

2016 年度学院留学 研究成果概要

種 別：学院留学（短期）
所属・職・氏名：経済学部・教授・藤井和夫
研究 課 題：クラクフ商工業の発展とポーランド近代社会の形成に関する歴史分析
留 学 期 間：2016 年 4 月 1 日～2016 年 9 月 15 日
留 学 先：ポーランド・クラクフ市
クラクフ経済大学

研究成果概要

クラクフは 11 世紀から 17 世紀までポーランドの首都であり、その建国後の分裂を受けた国家の再統合や、カジミエシュ大王等による国家建設の中心都市として大きな政治的意味を持っていた。しかしその背景として、首都となる以前からの交易の中心地としてのクラクフの経済的重要性が、その政治的、文化的発展の基礎をなしていた。17 世紀の初頭に首都がワルシャワに移った後も、様々な変化を経験しながらもクラクフの経済的重要性は完全に失われることはなく、19 世紀にポーランドが近隣諸国による分割で国民国家を失った時においても、クラクフは一定の経済的な意義を保ち続け、123 年に及ぶ亡国の時代のポーランドの文化と国民意識の拠り所としての存在意義はむしろ高まった。

今回の留学では、そのような歴史の中でのクラクフの経済的重要性を、商業を中心に確認することが大きな目的であり、我が国においてクラクフ商業史研究の蓄積が極めて少ないことを念頭に、研究対象時期を中世から近代まで広く想定して研究にとりかかった。具体的には、留学先のクラクフ経済大学の大学図書館、経済・国際関係学部図書室、関連機関の国際文化センター図書室、アカデミー (PAU 1872 年設立) 図書館等で、中世、近世、近代のクラクフ商業史研究のポーランドにおける基本文献を検索・収集することから調査を開始した。その後主要な文献や論文についての文献研究に移り、大まかに以下のような知見を得ることができた。

中世後期、クラクフは商業中心地として重要な役割を果たしており、東西および南北を結ぶ通過的商業取引がこの都市に繁栄をもたらした。その通商のコンタクトは一方で東部からイギリス、フランドル (ベルギー)、イタリア北部に、他方でグダンスクから黒海沿岸のジェノバの植民地に達していた。のちに地理上の発見がクラクフの国際商業に大きな影響をもたらした。クラクフの取扱商品の一部は主要な国際商品の地位を失うものの (例えばハンガリー産の銅)、16 世紀のクラクフの商業的コンタクトは中世末よりもむしろ広がり、イタリアではナポリまで、北東ではモスクワにまで達した。しかし 17 世紀半ば以降は、クラクフの国際的なコンタクトは次第に縮小して、オーストリア、モラヴィア、シロンスクおよび北部ハンガリーに限られた。

そうした大規模な国際商業との関わりのほかに、近隣の諸都市ややや広い小ポーランド地方の諸都市と結ぶ地方市場においては、クラクフは穀物、ホップ、食肉や木材など多様な商品を集散する中心都市として大きな役割を果たし続けた。近世に国際商業で大きな役割を果たすことができなくなると、クラクフは地方市場の中心都市としての役割をもっぱら担うことになり、その面での商業の発展が見られた。しかしその繁栄も、18 世紀末以降の国土の分割、国境の大幅な変更によって、ネットワークをなしていた多くの地方都市とのつながりを分断されたために、クラクフは 19 世紀には経済活動の厳しい冬の時代を迎えることになる。

中世における輝かしい繁栄と対照的に 18 世紀末から 19 世紀にクラクフ商業が衰退する要因は、以上のような国境の変更という地理的変動、国際関係の変化の影響が大きいのが、実はクラクフ経済の課題はそのような政治的、外部的な要素のみにとどまらない面が存在した。その問題点は中世の半ばにポーランドの国内でも最も生産活動が活発であったクラクフが、その後、手工業および工業生産拠点としての発展に必ずしも成功していないことにも表れている。

要約していえば、クラクフ商業のダイナミックな発展を妨げていたのは、実はクラクフ商人そのものが持つ保守的な性格だったのである。国際商業への参入を商人組合の会員にのみ限定する特権的な商業への偏り、そして中世に盛んになりかけていた生産活動への商人の関与の動きを自らの都市貴族化の動きの中に埋没させてしまう、そういうクラクフという都市の保守的な性格が、せっかくのチャンスの芽を摘んでしまい、その経済的繁栄の可能性を小さなものにしてしまっていた。この点については、個別商人の活動や商人組合などの商人組織の性格についての詳しい研究が必要であるが、関連する研究論文の収集はできたもののその分析は今後の課題となっている。

留学中のブロンスキ教授やプルフラ教授をはじめとするクラクフ経済大学の研究者との交流の中でその研究の重要性に気付かされたテーマに、クラクフおよび周辺地域での都市の発展という問題がある。現在のポーランドでは、上記のような商業史にかかわる新しい研究は意外に少ないものの、都市そのものに関する研究が次第に増えている。その背景には、体制転換以降の現代ポーランドにおける市民社会の発展がもたらす諸問題を理解したいという問題意識があるように思われる。

ポーランドの都市化の歴史に関する研究の中で、現在最も求められているのが都市ネットワーク全体の分析である。特に資本主義形成期である 19 世紀の分割時代の都市の研究が非常に重要であるにもかかわらず、国土の三分割という政治的混乱によって都市化や都市発展、そしてとくにそのネットワーク形成のプロセスが非常に多様で複雑な条件下で進行することになったために、資料面や分析視角の統一性という面でその研究は大きな困難を背負っている。現在は、ポーランドという国全体について、また各地方それぞれについての実証的な研究が進められているようであり、それらの成果の一部については、留学中に調査・分析することができた。留学中の研究の中心テーマであったクラクフの商業史の研究を、これら最近のポーランドにおける都市およびそのネットワークの研究成果と結びつけることが、今後残された課題の一つである。

そうした中で興味深かったのは、実際にクラクフで見聞する様々な風景の中に「ガリツィア回帰」とも言える現象があることである。クラクフから今日のウクライナ領の西部に及ぶ地方を意味するガリツィアという名称が、店の看板や研究のシンポジウムのテーマや文化・芸術のイベントのタイトル、論文や本の題名等々にしばしば出てくる。元来「ガリツィア」という用語には「遅れた」とか「未発展の」というような色合いが込められていて、例えば「ガリツィア的貧困」というように否定的な文脈で用いられてきた。それが実際に地方都市とそのネットワークをめぐる実証研究が進められる中で、古来ポーランドの一部をなし、長くハプスブルク領であったこの地方の「貧困」のイメージのもとになった 19 世紀の観察が、果たして科学的にどの程度の客観性を持つのかが見直され始めている。そして当時存在したガリツィア地方に対する先進的な見方も改めて再評価されている。

このような地方に関する歴史的評価の見直しの動きは、実は 1989 年にポーランドで起きた体制転換にもその根源がある。すなわち中央指令的な計画経済に代わって市場経済メカニズムが導入され、中央制御のいわゆる地方的国家行政機関に代わって真の地域的自治構造が生まれ、意思決定において独立した自由な地域の管理、経営の発想が現れてきているのである。地域の再構成、新しい地方行政の理念の確立が求められる中で、歴史の中での都市発展の経験が、今日の地方行政の近代化に何らかの示唆を与えるであろうということが、我が国では想像できないくらいポーランドでは期待され、その意味での歴史研究への関心が高まっているのである。

こうした現実の地域社会での一般的な関心と、その地域の歴史研究とが比較的深く結びついているのを見聞できたのは、経済史研究者としては非常に興味深い体験であった。今後引き続いてクラクフ商業史の全体像をまとめていきながら、このような留学での体験もその研究の中に反映させていきたいと考えている。